

おばあちゃんの家で飼われていた猫のチヨピが死んだ。チヨピは、目の色が黄色と水色で美しく、私の名前を呼ぶと、すぐに抱きついてくる、とても可愛い猫だった。私が小さい頃からずっと遊んでくれた最高の友達だ。

「チヨピ、死んじゃったの、どうして。」
私はおばあちゃんに何度も尋ねた。

「チヨピは歳を取って、安らかに眠ったんだよ。優しい顔で天国に行ったよ。」と話してくれた。また、動物病院の先生が

「長生きでしたね。寿命を最後まで生きられる猫は、本当に少ないですよ。」
と言っていたことも話してくれた。

初めて知った、猫も寿命がくると死んでしまうこと。そして、周りの人たちが、こんなにも寂しく辛い気持ちになること。そして何より、寿命が過ぎるまで生きられる猫がなぜ少ないのか、疑問を感じた。調べ始めてみた。すると、コロナ禍で猫を購入した人の数が増えたことを知った。猫は人の心をいやす動物だからだ。納得できた。しかし、コロナが収まりはじめると飼いきれなくなり、保健所やペットセンターに持って行き、手放す人の数が大きく増えていた。知らぬ土地に捨てに行く人たちも出ていた。その為なのか、北海道では、町全体に野生の猫が数十匹住み着き、夜中の鳴き声、住居周辺にまき散らかされる糞尿などの被害が多発し環境悪化を理由に野良猫の一斉駆除を開始したという話があった。つまり、捕まえて殺処分するということである。猫は、五、六ヶ月で成熟し、子どもを産める身体になる。野生化し群れが大きくなるのもそのためらしい。殺処分それは、人間なら死刑に値する。猫は死刑に値するような罪をおかしたのだろうか。捨てられた猫が生きていくことは罪なのだろうか。

「飼われた猫の人生が、人間の好き勝手にされている。こんなこと間違っている。」
私は飼われた猫のことについて情報が増えれば増えるほど胸が苦しくなった。

福島県は、犬猫全体の殺処分率都道府県で全国ワースト三位に位置する。そのうち猫だけの処分率は七十八・六%と高い数値である。野良猫の問題は、福島県に住む私たちが考えるべき身近な問題だったのだ。一年間に千七百六十七匹もの猫が、殺処分されていると考えるとぞっとする。

「飼い猫が、寿命まで生きられる社会に、」
このことをきっかけに、私は獣医師になることを決めた。そして、同時に今出来ることも考えた。学校のSDGsのコーナーに達成目標十二番「つくる責任つかう責任」がある。人間のいやしのために作られたペット達、飼い主には使う責任が生まれる。野良猫の殺処分ゼロを掲げよう。未来への光が差した。私の中に勇気と自信がわいてきた。